

東京大学史史料室ニュース

第42号 2009・3・31

目次

九州帝国大学の女子学生について.....	2
「赤門五十年変遷稗史」という大学新聞記事から－駒場前史の校風－.....	4
受贈図書一覧.....	6
史料室日誌抄録.....	8

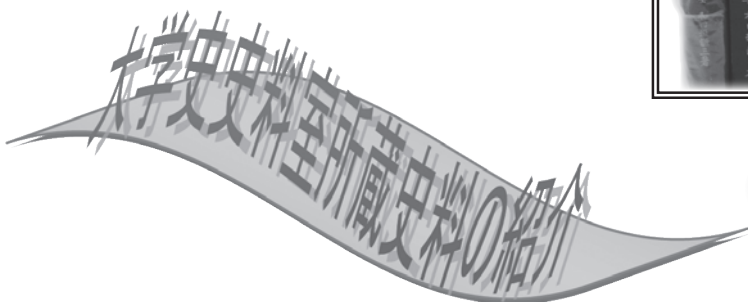
明治立身雙六



『文芸倶楽部』(博文館)4巻1号(明治31年1月1日)の附録。縦63.2×横66.8cm。幸田露伴考案の双六という。明治期の青年立志が図解されている。青年らが遊興等にふける姿を「墮落」や「怠慢」などと注意喚起している。

和田垣謙三の著書

和田垣謙三は「折に触れ時に応じ、興来り情湧く毎に、ポツリポツリポロリポロリ飛び出したるもの」などを著書に纏めたという。和田垣の講演講話は、将来大いに活躍するであろうと期待する青年らに向けてのものが多かった。



はじめに

帝国大学における女性の学部学生は1913年東北帝国大学理科大学に入学した3名をもって嚆矢とする。その後1923年東北帝国大学理学部に3名、法文学部に2名の女性が入学したことを契機に、九州、北海道、大阪、名古屋帝国大学の一部の学部が女性の入学を順次認めていった。女性の帝国大学への入学については、各大学の年史での言及をはじめ、湯川次義氏（『近代日本の女性と大学教育』不二出版2003年）や山本美穂子氏（『北海道大学大学文書館年報』第1号、2006年など）などの分析があり、九州帝国大学の事例については湯川氏の他、川添昭二氏（「女性の帝国大学入学について」－九州大学を中心に－『福岡県女性史・女性学ノート』創刊号、1993年）によって入学に至る経緯が明らかにされてきた。本報告はこれらの研究蓄積に学びながら、九州帝国大学に入学した女性の有り様の一部を跡づけていきたい。

九州帝国大学最初の女子学生

1925年4月、九州帝国大学法文学部最初の入学試験が、高等学校・大学卒業の無試験入学者74名、受験志望者240余名で実施された。この時3名の女性が受験し、うち2名が合格した。一人は、哲学科志望の調須磨子（26才）である。彼女は1916年に福岡直方高等女学校から奈良女子高等師範学校へ進学し、卒業後も1年間東京帝国大学で聴講生を経験した後、熊本高等女学校で教鞭を執っていた。もう一人は横浜出身で1921年に東京女子大学を卒業した織戸登代子（29才）であった。福岡日日新聞（1925年4月14日）はこの2人の入学を全受験者中の成績まで紹介しながら「多くの男子を蹴落として見事にパスし婦人のために解放された九大法文学部第一回の本科入学生」として大きく報道した。

「私達女性に大学の門戸を開放されたことは全く私達の命が救われた様に思ひます」（『九州大学新聞』第3号、1927年10月10日）と語った調は、九州帝大入学の動機について「（東京）帝大法文科の聴講生となって一ヶ年哲学を学んだのですが悲しいかな語学の力が足りないのので之には困りました…肝心の図書館が私共に利用されない事になっていました、そうした関係から許りではありませんがどうも聴講生としては張り合いがなく緊張が欠けて仕方がありません（『福岡日日新聞』1924年2月4日）」と、聴講生に飽きたらさらに九州帝大の正科生として哲学の攻究に励みたいと述べていた。かくして「紋付袴を以て制服とし襟

章を袴紐に」付けた彼女たちの大学生活が始まった。調は、在学中より福岡市西新町に高等女学校卒業者のための私塾百道女子学院を開いており、経営者と学生の2つの顔を持っていた。

『九州大学新聞』第3号（昭和2年10月10日）には「敬虔なる哲学者 調須磨子嬢を訪ふ 来年卒業の文学士 男女共学を説く」と題したインタビュー記事が掲載されており、調の率直な意見が述べられている。一部を紹介したい

記…「御卒業後の御方針は如何です。」

調…「矢張り学院の方にゐます。暇々には大学院の方で研究させて頂かうと思ひます。」

記…「男学生に対して何かお考へになつた事はありますか。」

調…「別にかう忙しくては何も考へる暇もありません。」（とうまく逃げられる、記者はすかさず）

記…「或人は男女共学は男女共妙な感情に支配されて勉強の能率を害すると言ひますが之に就いては如何にお考へになられますか。」

調…「私は別に考へたことはありませんが強ち其を悪いとは思ひませんね。男子の方だつて女に負けてなるまいと言ふ氣になり却つて能率が増進するのぢやないかと思はれます。それに私達女性に大学の門戸を開放されたことは全く私達の命が救はれた様に思ひますよ。私達にだつて命はあります。食ふ事と性欲満足丈が命ぢやありません。勿論其を否定するのぢやありませんが、私の言ふ命は此等よりも遙か奥の方に高き聖き威力として存在すると思ひます。其の力が私達の命と信じます。此所に学ばれる女学生は皆此の命なり力を持つてゐます。男女共学が許されなかつたら私達の命は何所で開かれるでせう。」

（嬢の熱心なる議論は立板に水の如くトウトウと論じ立てられる。）

調…「男女共学を否定される方とは正反対の意見を持つてゐます。それで男学生の方も聖き心で別に女性を恐れるでもなく軽視するでもなく虚心坦懐に私達に話されたらと思ふ事が度々あります。尤も女学生が目立つような服装をしたりするには賛成できませんが」

（記者は更に一歩進めて問いつめる。）

記…「其の交際の中に恋愛関係が生じたらどう致します。」

調…「其れが聖き交りで結婚に終る様なものなら強て否定はしません。」

（あ、此我意を得たり。女性に此意氣ありてこそと記者は独り得意になる。）

入学から4年、調は1928年に「フッサールの現象学批判」の卒業論文で九州帝国大初の女文学士として卒業した。織戸も「ローザ・ルクセンブルグの資本蓄積に関する研究」の卒業論文で日本初の女性経済学士となった。彼女たちが卒業した1928年3月は大学令改正以来中止されていた卒業式が復活した年でもあり、福岡日日新聞は「十年振りに復活する新学士晴れの卒業式－異彩を放つ紅二点の女学士」と題して大きく報道した(1928年3月30日付)。調は百道女子学院にて啓蒙活動を続け、織戸は卒業後しばらく大学に残って研究を続けていたが、後に横浜に帰りその後の消息は不明である。

九州大学初の女性教授

この2人の入学を皮切りに九州帝大に入学した女性は、卒業生名簿(1945年迄)で確認する限り31人名である。その中で、戦後、九州大学の最初の女性教授となったのが城野節子(1947年卒業)であった。

城野は1914年10月21日中国旧満州奉天に生まれ、中国青島で過ごした。その後、福岡県立女子専門学校文科研究科でフランス語を学び、卒業後は東京にいる姉の元で「花嫁修業」をするも福岡へ戻り、約1年間試験準備に励み、1943年に九州帝大法文学部への入学を果たし、仏文科教授進藤誠一を師事した。城野は後に九州帝大での様子を次のようにふり返っている。

その頃、帝国大学で女子の入学が許されていたのは、たしか東北帝国大学と九州帝国大学だけで、私が入学した当時の九大の法文学部には女子学生が3人、3年に法科のAさん、2年に国文科のBさん、1年に私。学生出入り口の左横にあった「女子学生控え室」では講義の合間に時折、3人が顔を合わせたものです。

Aさんは弁護士志望でその弁舌さわやかなること、その意気さかんなること、頭には大きな独特の髪をつけて談論風発まさに自他共に許す女傑型

Bさんは温厚で聡明、静かな学究型で西式健康法に心酔して、朝抜きの生食主義。

いつもその独特の調理法とご利益を聞かされたものです。

女子学生控え室は、床はコンクリート、机二つに椅子三脚。もちろん地下室ですから、今思うと女囚の監房みたいなものだったかもしれませんが、それでも時には花が2、3輪ありました。私達には結構憩いの場所でありました。…学徒出陣を送ったあとの学内は文字通り火の消えたような静けさでしたが、それでも残留学生のために講義は続けられました。もともと専攻生が3人しかいなかった私のクラスは、2人がいなくなった後、私1人のために講義をしていただくのはまるで個人教授のよう

有り難くもあり、勿体なくもありました。今日このごろ、大入り満員の演習室のぼろぼろになった椅子の背を見るにつけ、あの頃の美しく冴えた紺色が思い出されて、激しい時代の推移に感慨深いものがあります。

「学の道を求めて」『大学受験』4月号(1956年2月)

城野は1947年に学部卒業後、大学院特別研究生としてフランス文学の研究を続け、「敗戦になり新制大学が生まれて、フランス語の先生がたりないということで、お手伝いをするようになって」(『西日本新聞』1964年7月)、1950年5月九州大学教養課程(第三分校)の講師となった。着任直後、大学へ向かうバスの中で学生が「フランス語は、メツチェンだってな」と話しているのを聞いたとき、「はじめて自分の『性』を認識させられた」という(『大学広報』No.314 1977年)。城野の授業を受けた学生(1963年卒)の一人は「女性の先生だというので受けたけど、…何回か追試を受けた記憶がありますよ」と語っている(「先輩からひとこと」『会報』第6号、九州大学経済学部同窓会東京支部 2004年6月25日)。当時、女性教員は城野一人であった。城野はフランス文学研究を進め、「スタール夫人とドイツ旅行」(『独仏文学研究』1952年)、「スタール夫人とイタリー」(同1956年)、「スタール夫人とドイツの印象」(『フランス文学研究』1952年)などを発表し、『ひとりのできるフランス語』(大林書店 1982年)、『スタール夫人研究』(1976年朝日出版社)を出版した。1957年10月から一年間、フランスのカン大学に留学し、滞仏中の旅行記を『わたしのふらんす日記』(1960年 白水社)としてまとめた。九大での研究と教育のかたわら、福岡県立女子専門学校の大学昇格に際しては「大学昇格期成実行委員会」のメンバーとして尽力した。1963年4月には教養部助教授、1966年10月に九州大学の初の女性教授となった。

おわりに～今後の課題～

私は以前、九州帝大の女子留学生について分析したことがあるが[「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』研究成果報告書(代表者折田悦郎)2004年]、同じ女性でも日本人女性と女子留学生では学部選択など制度上の違いがあった他、そもそも女子学生のモチベーションに差異が読みとれた。今後は、本稿で明らかにしたような女子学生個人々の足跡を追うとともに、日本人・留学生に拘わらず、女性が何を学び、どのような学生生活を送っていたかという生活実態、学習環境などの詳細を追い、近代日本の高等教育機関、帝国大学の新たな位置づけを試みていきたい。

(さきもと あい：福岡大学非常勤講師)

「赤門五十年変遷稗史」という大学新聞記事から —駒場前史の校風—

谷本 宗生

全国地方教育史学会の公開研究会「大学関係文書と大学史研究」（平成20年11月29日、早稲田大学教育学部開催）において、筆者（谷本）は発表者の1人として「大学関係史・資料をいかに入手するか—金沢大学・東京大学に勤務して—」を問題提起した。大学史研究の調査が一般に困難といわれるなかで、どのようにして大学関係史・資料の調査は実施可能であるかを模索する内容であったと考えている。当日の発表骨子は、次のとおりである。

はじめに

大学ホーム・ページの活用—史料所在先の確認—
編纂された『大学史』（『大学〇〇年史』）の活用—史料有無の把握—

刊行されている『史料目録』『史料集』の活用—史料の閲覧—

所蔵史料を活用した研究著作—抜き刷り等の提供—
おわりに—報告者自身の研究意識—

上記の学会発表後、本学東京大学の学生保健診療所の戦前・戦時下の活動を調べるために、筆者は当時の学内動向に詳しい『帝国大学新聞』の縮刷版を読んでみた。『帝国大学新聞』第455号（昭和7年11月21日）の7面には、「学生の健康相談に乗りだしたい」とする学生課が『学生医学の指導』を発行した記事が掲載されていた。しかし、筆者はその記事の左横にあった「赤門五十年変遷稗史」（だいがくごじゅうねんさかえのききがき）という囲み記事に目が留まった。昭和7年11月、『東京帝国大学五十年史』上・下冊が刊行される。『帝国大学新聞』の「赤門五十年変遷稗史」は、第446号（昭和7年9月26日）の「時と共に学生気質は移る」から始まり、第464号（昭和8年1月30日）の「変遷稗史を閉ず、総長物語」（第15回）で終わる、東京帝国大学の五十年（東京大学史）を多角的に評した記事であった。なかでも筆者は、第9回の「駒場今昔 まるで無茶苦茶な創立の頃 試験最中にちょいと一風呂 賄征伐にテロは跳梁し」（昭和7年11月21日）という上記の記事に強く興味ひかれた。それは、駒場農学校から帝国大学農科大学時代ころの特徴ある駒場前史の校風を回顧した内容であった。

その記事には「駒場は離れ島よろしく文化の中心から引き離されて、学生達は矢たらにバンカラを競ふに至つた。」とあり、「駒場にちつ居して若さと血気のはげ口に悩んでゐた彼等は又しばしば食堂で蛮勇を振り賄征伐の歴史を開拓した。賄征伐の創生期

は「喰込み」と称し通常四杯の飯を食ふ者が八杯を平げ「飯が足りないぞ！」と賄人に怒鳴りつけるといふ粗ぼくな原始的手段だつたが明治一八年頃には極度にテロ化してしまつた」と、駒場農学校の賄征伐（賄人と生徒らが衝突し、食堂で乱闘する）について強調されている。記事を読んでいくと、その賄征伐の「巨頭」と目された古在由直（後に、第10代東京帝国大学総長となる）に対して、古在の平均得点より15点削るという罰点処分が適用されたが、古在自身の得点が高かつたため処分後も優等生で卒業したというエピソードが触れられている。このエピソードにあった古在の首席卒業を確かめるべく、筆者は『東京大学卒業生氏名録』（昭和25年）を直ぐにみたが、明治19年7月卒業の農芸化学科・農学士の筆頭には「古在由直（京都）」の氏名が明記されていた。さらに記事には、明治10年代の「駒場学生気質」として「酒をのんでしまつた彼等は皆下駄をはいて教室で講義を聞いた。講義が気に入らないと一斉にがたがたと足踏をやりだし教師に警告し臨検に回る舎監の足音を聞くと慌てて下駄を懐にねじこんだり窓の外に投げだしたりしたといふやんちやな時代」であつたとも回顧されている。「賄征伐」もそうであるが、生徒らの「下駄」による抗議風景などは、後の第一高等学校の校風とも相通じる点が多いものと思われる。

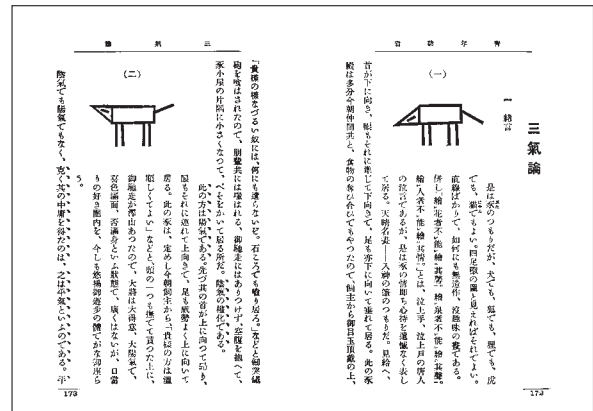
明治20、30年代の帝国大学農科大学時代についても、「古在博士の教授時代には講義を丁寧な石版刷にして学生の便をはかつてくれたりし、横井博士の講義は得意の盆踊りや農村民俗壊乱の話に学生を楽ませ経済原論の和田垣博士は「土台大学などで講義を聞かうといふのは頭が古い」といふ達見から与太や駄洒落ばかりの講義を続けて試験問答には「何でもいいから思つてゐることを書け」などとだし、学生も一たん風呂に入つたり散歩して来て答案を書いたり…」と、講義風景の特徴を示している。実際に古在由直の講義を学んだ奥田譲や橋本伝左衛門も、「美しいプリントを与へて明快な講述をされるのであるから、学生は手と頭を労する事なくして良く判つた。」や「先生がなり振りかまわず極めて熱心に講義された。石版刷りの極めてよく整つた農産製造学のプリントを学生に与へ、其文句通りに講義されたので学生は筆記の必要なく、頗る安気に聴講したものである。プリントが解り易いためか、横着な学生は欠席勝になつて出席者が漸次少数になつ

たが、それでも先生は平気で何時も熱心に講義された。チョークを右手に持ち、講義を進めるに従つて之でテーブルの上を叩き、講義の終る頃にはそこいらが真白になり、先生の手は固より真白、その手で上着を撫で頭をかかれるものだから、ぼうぼうたるあの乱髪から脚の先まで白墨の粉だらけ。大声で時間一杯講義されて御機嫌よく引きあげられるのが常であつた。」と証言している（『古在由直博士』昭和13年）。

筆者の手元にある、「句も吐く」という「吐雲」の号をもつ和田垣謙三（法学博士）の機知に富んだ文献をいくつか読んでみても、やはり興味深い。「医科の選手は前年に於て敢なき敗北を取りたるを以て、本年こそは優勝旗を我手に収めんと、必勝を期して一心不乱に練習を重ね、殊に当日は一同斎戒沐浴して或る神体を祭り、神前には蠟燭を立てて只管天祐を祈れり。競漕の時刻切迫し、いざ出陣といふ刹那、如何なる機なりしか、神前の蠟燭ハタと倒れぬ。…曰く、「之こそ必勝の瑞兆なれ。思へ蠟燭は倒れたり、蠟はLawなり、法科なり。蠟燭は倒れたり、蠟は白蠟なり、工科なり。Lawは倒れたり、白は倒れたり。然れども火は猶ほ盛に燃えつつあり。火は赤色なり、之れ我が医科にあらずや。…医科大学万歳」と。一同奮躍、医科大学の万歳は三たび絶叫せられ、意気既に三軍を呑む。斯くして当日の月桂冠は果して医科大学の有に帰せり。」（『帝大端艇競漕と信念』『兎糞録』大正2年）隅田川で行われた大学のボート・レース観戦好きの和田垣には、次のような逸話も残されている。ある年の春、隅田川の大学ボート・レースと小金井の観桜がぶつかり、結局何方へも行かれなかった和田垣は講義の最中、黒板に「桜どき船漕ぐもよしこがねいもよし」と書いたという（森銑三編『明治人物逸話辞典』昭和40年）。

さらに、和田垣は青年らに向けて数多くの演説講話を行っている。「(一) 是は豚のつもりだが、犬でも、狐でも、狸でも、虎でも、猫でもよい。四足獣の図と見ればそれでよい。直線ばかりで、如何にも無造作、没趣味の画である。…見給へ、首が下に向き、眼もそれに準じて下向きで、足も亦下に向いて垂れて居る。…御馳走にはありつけず、空腹を抱へて、豚小屋の片隅に小さくなつて、べそをかいて居る所だ。陰気の権化である。(二) 此の方は陽気である。先づ其の首が上に向つて昂り、眼もそれに連れて上向きで、尾も威勢よく上に向いて居る。…(三) 陰気でも陽気でもなく、克く其の中の中庸を得たのは、之は平気といふのである。平気平左衛門君の心状である。之を絵に表すと、首は上にも下に

も向かず、眼も同様で、真直に前の方を見、尾も亦下にも垂れず、上にも向かないで、真直である。…悲観に陥らず、楽観に溺れず、達人の達観、大人の大観なるものに到達することを、ゆめ怠つてはなら



ぬ。」（『三氣論』『青年諸君』明治42年）

農芸化学科を卒業した藪田貞次郎も、和田垣の講義ぶりを「例えば、英語でスペルの一番長い字は何だという。それはSmiles(数哩)だ、といったように、とにかくシャレで有名な先生だが、英語が得意だから、自分でつくった詩を英訳してきかせたり、その次の時間にはダンスの話をしたり、結局農業経済の話はあまりきかずじまいのようだったが、欠講も多くて学生を喜ばせた。」と証言している（鈴木信太郎編『赤門教授らくがき帖』昭和30年）。

「赤門五十年変遷稗史」(第9回)の「駒場今昔」は、「東京帝大の分科大学になるに及んでも不忍池の蓮の葉の青さを増すに従ひ帝大生の顔は青くなるといふ公式が必ずしも駒場には適用されず何時の時代ものんびりしたほがらかさは駒場の伝統をなしてゐた。」と結ばれている。このような本学大学史の特徴ある回顧談は、本学の校風などを考えていくうえでも重要な史料である。学部・学科史や講座史にとどまらず、従前二次史料とされた本学校友会誌や同窓会誌、大学新聞などからも、悉皆的に貴重な本学の回顧談を発掘し、それらをデータ・ベース化して情報を共有する必要があると実感した。筆者も多くの関係史料や情報を協力提供した「東大農学部歴史」(農学生命科学研究科広報室管轄 <http://www.a.u-tokyo.ac.jp/history/index.html>)に、上記の回顧談も補足するなどすれば、それは本学大学史像の究明にほかならないと思われる。筆者自身、近・現代日本の大学関係史・資料のさらなる発掘及び公開の促進と、大学史研究の基本情報の共有化をライフ・ワークとしている。

(たにもと むねお：大学史史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成20年10月～平成21年1月）

物性研だより 第48巻第3号 東京大学物性研究所	平成20年10月	倍楽帖 拓殖大学創立百年史編纂室	平成20年10月
U P 432号～435号 東京大学出版会	平成20年10月～ 平成21年1月	成瀬記念館 2008 日本女子大学成瀬記念館	平成20年9月
一高同窓会会報 第401～403号 一高同窓会	平成20年10月～ 平成21年1月	佛教大学報 第58号 佛教大学	平成20年10月
私の昭和史 戦後篇 上,下 一高同窓会	平成20年11月	宮城学院資料室年報－信・望・愛－ 第14号 宮城学院資料室	平成20年11月
南原 繁－近代日本と知識人－ 一高同窓会	平成9年7月	青淵 第七一六号～七一九号 渋沢栄一記念財団	平成20年11月～ 平成21年2月
心臓刺激伝道系の発見者田原淳の一高青春日記 一高同窓会	平成20年9月	アーカイブズ 第34号 国立公文書館	平成20年12月
近衛文磨－「運命」の政治家－ 一高同窓会	平成15年3月	国立公文書館年報 第37号（平成19年度） 国立公文書館	平成20年9月
校友会雑誌第百三十八号号外 寮歌集（コピー） 一高同窓会	明治37年6月	大学アーカイブズ No.39 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会	平成20年10月
健康相談室便り 一高同窓会	平成13年8月	江戸東京博物館NEWS vol.63,64 東京都江戸東京博物館	平成20年9月,12月
芥川龍之介 一高同窓会	平成15年5月	立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL.16-2 立命館大学国際平和ミュージアム	平成20年12月
岸 信介－権勢の政治家 一高同窓会	平成7年2月	霞城館だより No.47 霞城館	平成21年1月
広田弘毅 一高同窓会	平成20年6月	開港のひろば 第102号 横浜開港資料館	平成20年10月
丸山眞男－リベラリストの肖像 一高同窓会	平成19年4月	図録 日本人を南米に発展せしむ 日本人のブラジル移住と渋沢栄一 渋沢史料館	平成20年10月
Ouroboros 第35号 東京大学総合研究博物館	平成20年12月	金沢大学資料館だより 第32号 金沢大学資料館	平成20年9月
愛知大学史研究 2008年度版 愛知大学東亜同文書院大学記念センター	平成20年10月	名古屋大学大学文書資料室ニュース 第25号 名古屋大学大学文書資料室	平成20年10月
大阪市立大学史紀要 第1号 大阪市立大学大学史資料室	平成20年10月	京都大学大学文書館だより 第15号 京都大学大学文書館	平成20年10月
皇學館大学百二十六年の軌跡（図録） 皇學館 館史編纂室	平成20年11月	慶應義塾福澤研究センター通信 第9号 慶應義塾福澤研究センター	平成20年10月
図録『駒澤大学禅文化歴史博物館所蔵の仏教遺物』 駒澤大学禅文化歴史博物館	平成20年11月	先端研ニュース 第68号 東京大学先端科学技術研究センター	平成20年10月
駒大史ブックレット 8 駒澤大学禅文化歴史博物館	平成20年10月	徳川記念財団会報 第12号 徳川記念財団	平成20年12月

東北大学百年史 二 通史二 東北大学	平成21年 1 月	大阪市立大学 学生寮の歴史 大阪市立大学大学史資料室	平成13年 3 月
漫画を考える ちばてつや原画展 (ポスター・チラシ) 小杉放菴記念日光美術館		大阪市立大学百年史 部局編上,下 大阪市立大学大学史資料室	昭和58年 6 月
平賀讓 名軍艦デザイナーの足跡をたどる 大和裕幸 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)	平成20年12月	「育つ・学ぶ」の社会史 - 「自叙伝」から 山本敏子 (駒澤大学)	平成20年 9 月
緑丘アーカイブズ 第 8 号 小樽商科大学百年史編纂室	平成20年 9 月	啐啄 第48号 日本の教育改革を進める会	平成21年 1 月
東海大学学園史ニュース No. 3 東海大学学園史資料センター	平成20年11月	福島県史料情報 第22号 福島県歴史資料館	平成20年10月
東北大学史料館だより 第 9 号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成20年 9 月	放送大学DVD教材 大学と社会 ('08) 放送大学教育振興会	
東京大学アイソトープ総合センターニュースVOL. 39 NO. 2, 3 東京大学アイソトープ総合センター	平成20年 9 月, 12月	ローベルト・コッホ博士日本紀行点描 (明治41年6月12日～8月24日) 川俣昭男	平成20年10月
内村鑑三 谷本宗生	昭和59年12月	大学史研究 第23号 谷本宗生	平成20年10月
教育学研究 第75巻 第 3 号 谷本宗生	平成20年 9 月	かわら版 第265～268号 谷本宗生	平成20年10月～12月
日本教育史往来 No. 176, 177 谷本宗生	平成20年10月, 12月	大学史研究通信 第55, 56号 谷本宗生	平成20年 9 月, 11月
勸学院の雀 第157～159号 谷本宗生	平成20年 9 月～12月	関東教育学会紀要 第35号 谷本宗生	平成20年10月
地方史研究 第三三五, 三三六号 谷本宗生	平成20年10月, 12月	教育史学会 会報 No. 104 谷本宗生	平成20年11月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第23号 谷本宗生	平成20年 9 月	地教史学通信 第111号 谷本宗生	平成20年10月
学都 No. 28, 29 谷本宗生	平成20年10月, 12月	かわら版 8-1号 谷本宗生	平成20年12月
大東文化歴史資料館だより 第 5 号 谷本宗生	平成20年11月	大学附属臨海実験所水族館 近代日本大学附属博物館の一潮流 谷本宗生	平成20年10月
高等教育ガバナンスにおける大学・専門職団体の機能に関する国際比較研究成果報告書 国立大学関係団体資料目録 谷本宗生	平成20年 3 月	金沢大学資料館・附属図書館特別展 うけつがれた「モノ」たち - 明治・大正・昭和の掛図・模型 - (ポスター・チラシ) 金沢大学資料館	平成20年度
大隈重信生誕170周年記念講演会 新しい大隈重信像を目指して (ポスター) 早稲田大学大学史資料センター		東海大学学園史資料センター写真展 建学の地、清水 - 海壽叱咤す太平洋 - (図録) 東海大学学園史資料センター	平成20年10月
<論文>お雇い英国人教師ヘンリー・ダイアーの日本研究 - 成果と特色 - (抜刷) 加藤詔士 (名古屋大学教育学部)	平成20年10月	信綱秘書 村田邦夫 - 師を敬慕し、"鈴鹿もうで"に捧げた半生 - (図録) 佐佐木信綱記念館	平成20年11月
日本女子大学創立者成瀬仁蔵 生誕一五〇年記念 写真で見える成瀬仁蔵 その生涯 日本女子大学成瀬記念館	平成20年 6 月	東京大学理学系研究科・理学部ニュース 40巻 4号, 5号 東京大学大学院理学系研究科	平成20年11月, 平成21年 1 月

史料室日誌抄録（平成20年10月～平成21年1月）

- 10月11日（土） 谷本室員、教育史学会大会準備委員会打合せ（青山学院大学）。
10月23日（木） 谷本室員、日本教育学会大会準備委員会打合せ（東京大学）。
10月24日（金） 衆議院憲政記念館「怒濤の幕末維新」特別展に、加藤弘之日記の貸出。
10月25日（土） 谷本室員、教育史学会大会準備委員会打合せ（青山学院大学）。
10月29日（水） 大学産業医巡視訪問。
10月30日（木） 谷本室員、情報学環小川ゼミ生見学対応。
11月12日（水）～11月14日（金）
『東京大学史史料室ニュース』第41号刊行、発送。
11月19日（水）～11月20日（木）
谷本室員、東北大学史料館見学及び明治期帝大生講義ノートデジタル化の打合せのため出張（東北大学）。
11月22日（土） 谷本・大間・小川室員、フェノロサ学会参加（東京大学）。
11月29日（土） 谷本室員、全国地方教育史学会フォーラムにて発表（早稲田大学）。
12月26日（金） 総長室より一部史料の受入れ。
1月14日（水） 谷本室員、大学入試センター試験分封作業に従事。
1月16日（金） 『東大紛争関係書類・新聞』デジタル化完了納品。
1月19日（月） 谷本室員、特別講義「大学・学問論」講師のため出張（金沢大学）。
1月23日（金） NHK及び日本テレビ『東大紛争関係番組』デジタル化完了納品。
1月28日（水） 谷本室員、日本教育学会大会準備委員会打合せ（東京大学）。
1月31日（土） 谷本室員、「大学アーカイヴズに関する研究会」参加（京都大学）。

この間の閲覧者数

学内者 3名
学外者 7名

主な学外閲覧者所属機関

NHK 情報ネットワーク、麻布高校、埼玉学園大学、学習院大学

その他

文献撮影・複写許可件数 6件
調査（照会）件数 15件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第42号

発行日：2009年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2